

大学生の家族のケア役割経験に対する両価的認知の研究

樋 渡 由 貴

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2020年10月30日受付、2020年12月15日受理)

要 旨

本研究の目的は、大学生の家族のケア役割経験によって生じる心理的影響や、その役割に対する認知的評価の両価性について、経験しているケア役割の特徴から明らかにしていくことであった。大学生を対象に質問紙調査を実施した結果、ケア役割経験から生じる心理的影響においては、ケア役割を担う期間が一時的あるいは1年未満である場合、要ケア家族の状態に対する理解が不十分であることから、自身がケアを担っていない状況において「罪悪感」を感じやすいことが考えられた。また、きょうだいのケアを担っている場合、祖父母またはその他の家族のケアを担っている場合よりも「自覚的成熟」を感じやすいことが示唆された。さらに、ケア役割に対する認知的評価においては、要ケア家族の状態が慢性的な困難である場合、自身が担うケア役割について「拘束感」や「限界感」といった負担を強く認識していることが考えられ、経験しているケア役割の特徴とそこから生じる心理的影響や認知的評価には、それぞれ肯定的側面と否定的側面に特徴があることが明らかとなった。

キーワード：家族のケア、大学生、心理的影響、若者ケアラー

1. 問題と目的

1. 家族介護者の介護に対する認知

これまでに行われてきた介護経験に関する研究の多くは、Lazarus & Folkman (1984) のストレス認知理論を基盤とした介護負担の軽減に着目した研究である。このような介護負担に関する研究では、負担軽減の要因としてソーシャルサポートを取り上げたものが多くある。しかし、一部の研究者は負担軽減や介護継続に影響を及ぼす要因として、介護者の介護に対する肯定的な評価を取り上げている。たとえば、Lawton, & Kleban (1991) は、介護によって得られる喜びや満足感が介護負担やストレス症状の軽減に及ぼす効果について検討している。また、山本 (1995) は、介護経験には、負担以外にも多様な側面があると考え、介護者を理解するためには負担だけに注目するのではなく、肯定的側面も含めた広い視点をもつことが重要であると指摘している。さらに、広瀬ら (2006) は、介護家族者が感じる両価的な認知的評価に関連する要因を検討し、仕事の有無や健康度、インフォーマルサポートに対する満足のなどがあることを示唆している。

また、介護の文脈とはやや異なるものの、サポートが必要な障害児・者をきょうだいに持つ者の経験についても研究が行われている。Siegel & Silverstein (1994) やHarris (1994) は、きょうだいが背負う年齢や性別にふさわしくない高すぎる責任や、子どもらしくふるまう権利を認められていない状況、友人関係や進路の制約などの否定的側面を明らかにしている。一方、Meyer (1994:2000) は、きょうだいに見られる「特有の経験や悩み」が苦痛にもプラスの影響にも働きうると述べたうえで、肯定的側面が存在することに言及している。

2. 若年介護者について

近年、Young carer (以下、「ヤングケアラー」と日本語表記する) と呼ばれる子どもたちを、支援の対象にしていく動きが先進国を筆頭に活発になっている。その存在に早くから注目し、調査・研究・支援を体系的に取り組み始めたのはイギリスである。イギリスでは、ヤングケアラーを「他の人のためにケアを提供している、または提供しようとしている、18歳未満の者 (ただし、ケアが、契約に従って行われている場合、ボランティア活動として行われている場合は除く)」と定義されており、1998年以降、国や自治体の委託や

支援を受けて多くの調査が実施されている。柴崎（2005）の「The Young Carers Research Group（以下、YCRG）」による2003年の調査の概要では、イギリスのヤングケアラー該当児童6178人のケース報告から、その平均年齢が12歳であること、ケアの対象を大きく占めるのは障害のある母親、きょうだいであること、半数以上が1週間当たり11時間以上をケアに当てていることが明らかとなっている。

日本では、日本ケアラー連盟が、ヤングケアラーを「家族にケアを要する人がいる場合に大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子ども」と定義し、ヤングケアラープロジェクトとして2015年、2017年に小中学校の教員を対象とした実態調査を行っている。北山ら（2015）の実態調査では、中学生の1.2%がヤングケアラーである可能性が示されており、主な家庭内役割は「きょうだいの世話」と「家事全般」であること、それらの生徒の学校生活上の問題として「忘れ物の多さ」があることが指摘されている。さらに、濱島ら（2018）の高校生に対する調査では、5.2%がヤングケアラーである可能性があるが、ケアをしている状況については教員やその他の専門職に対して話をしていないということが明らかとなっている。また、澁谷（2014：2018）においても、日本におけるヤングケアラーは、イギリスの調査と比較し、きょうだいの世話役割を担う機会が多いこと、祖父母の介護役割を担う機会が多いことが挙げられている。ヤングケアラーの定義には当てはまらない18歳以上の若年介護者については、若者ケアラーと呼ばれ、これまでに松崎（2015）や武田（2016）が若年介護者の就労や自立に向けた相談支援などの必要性について述べている。

ヤングケアラーや若者ケアラーの支援を考えていくうえでは、ケアを必要としている家族が誰であるか、またその家族の状態などを考慮して検討していく必要がある。また、それぞれのケアラーにとって家族のケア役割経験がどのような心理的影響を及ぼしているのか、ケア役割をどのように認識しているかという視点からも理解を深めていく必要があると考える。

3. 本研究の目的

本研究では、介護負担の軽減に影響を及ぼすと考えられる介護経験に対する肯定的側面にも注目したうえで、ヤングケアラーや若者ケアラーにとってのケア役割経験から生じる心理的影響や、その役割に対する認知的評価の特徴を明らかにすることを目的とする。また、ヤングケアラーや若者ケアラーとしての自身の経験を過去のものとして振り返り、評価することができるという点から、調査協力者を青年期の大学生とし、ヤングケアラーの定義には当てはまらないが一時的なケア役割の経験がある者も含めて調査を行う。

II. 方法

1. 調査協力者

Z女子大学の学生

2. 調査方法

筆者が担当する講義終了後に調査協力依頼を行い、同意を得られた学生に対し質問紙調査を行った。質問紙は講義終了後に配布し、その場での記入と回収を求めた。なお、調査期間は2020年8月～10月であった。

3. 質問紙の構成と項目

フェイスシートでは、年齢、家族構成、要ケア家族の有無、ケア経験の有無、要ケア家族に関する質問、ケア経験に関する質問を尋ねた。

ケア役割経験から生じる心理的影響については、奥山（2018）の「ヤングケアラー心理尺度改訂版」から、「実務的負担」「過剰なケア役割」「不自由さ」「安否の心配」「自覚的成熟」「家事への貢献」の6因子構造が想定されている23の項目と、「逃避感情」「積極的関与」「罪悪感」の3因子構造が想定されている16の項目を用いた。

また、ケア役割に対する認知的評価については、櫻井（1999）の「負担感尺度」から、「拘束感」「限界感」「対人葛藤」「経済的負担」の4因子構造が想定されている16の項目と、「肯定的評価尺度」から、「介護状況

への満足感」「自己成長感」「介護継続意志」の4因子構造が想定されている14の項目を用いた。

4. 分析方法

フェイスシートの結果から得られたケア経験の有無、要ケア家族、ケア経験の年数、を独立変数、ケア役割経験から生じる心理的影響の尺度、ケア役割経験に対する認知的評価の尺度の各因子の平均点を従属変数とし、t検定あるいは被験者間1要因分散分析を行った。

5. 倫理的配慮

すべての調査協力者に対し、調査依頼の際、調査内容の説明とともに、匿名記述の選択や個人が特定されるような結果の公表を行わず個人情報保護されること、研究協力の同意をしない場合も不利益を受けず、同意後も撤回できることについて口頭説明を行ったうえで、これらに同意する場合のみにおいて回答を行うよう求めた。

III. 結果

本章では、まずフェイスシートの回答結果について単純集計を行った結果から、調査協力者のケア役割経験について述べる。次にケア役割経験から生じる心理的影響について、さらに認知的評価の項目について分析結果を述べる。

1. 調査協力者のケア役割経験

220名の調査協力が得られ、そのうち有効回答数は216であった。そのうち、ケア役割の経験があると回答した者は63名であり、その経験の詳細については以下の通りとなった (Table.1)。

Table.1 ケア経験者の概要

年齢	18歳(13)、19歳(18)、20歳(16)、21歳(12)、22歳(4)
ケアの時期	現在(24)、過去(34)
ケアの期間	1年未満(12)、1年以上(45)
要ケア家族	親: 母親(8)、父親(8)
	きょうだい: 兄(1)、姉(2)、弟(12)、妹(9)
	祖父母またはその他: 祖母(15)、祖父(6)、その他(2)
要ケア家族の状態	要介護: 要介護(11)
	障害や病気: 身体障害(7)、知的障害(2)、精神障害(6)、 発達障害(3)、その他の病気(5)
	幼さ: 幼さ(16)
	一時的なケガや病気: 一時的なケガ(2)、一時的な病気(7)

※()内はN

2. ケア役割経験から生じる心理的影響

ケア役割経験から生じる心理的影響については、「実務的負担」「過剰なケア役割」「不自由さ」「安否の心配」「自覚的成熟」「家事への貢献」の6因子に含まれる23項目、「逃避感情」「積極的関与」「罪悪感」の3因子に含まれる16項目について、「1.全くあてはまらない」「2.どちらかといえばあてはまらない」「3.どち

らともいえない」「4.どちらかといえばあてはまる」「5.とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

各因子において、ケア役割を担う期間（1年未満・1年以上）を独立変数とした対応のない t 検定（Welch 検定）を行ったところ、「罪悪感」において、ケア役割が1年未満の群が1年以上の群よりも有意に得点が高いことが示された ($t(13.7) = 2.65, p = .019$)。一方、その他8つの因子では、有意な差はみられなかった (Table.2)。

Table.2 ケア役割経験から生じる心理的影響に関する因子項目の期間別平均値

	1年未満(N=11)		1年以上(N=39)		df	t 値
	Mean	SD	Mean	SD		
実務的負担	1.75	0.84	1.70	0.64	13.4	0.18
過剰なケア役割	2.47	0.73	2.37	0.63	14.5	0.41
不自由さ	1.60	0.65	1.87	0.83	20.4	1.19
安否の心配	3.03	1.40	3.09	1.28	15.0	0.14
自覚的成熟	2.27	1.27	2.63	1.24	15.8	0.82
家事への貢献	2.73	1.15	2.71	0.98	14.4	0.06
逃避感情	1.92	1.01	2.07	0.87	14.4	0.46
積極的関与	2.47	0.91	2.70	0.79	14.5	0.77
罪悪感	2.64	1.15	1.64	0.91	13.7	2.65*

* $p < .05$

各因子において、ケア役割の時期（現在・過去）を独立変数とした対応のない t 検定（Welch 検定）を行ったところ、「積極的関与」において、現在ケア役割を担っている群が過去にケア役割を担っていた群よりも有意に得点が高いことが示された ($t(42.8) = 2.21, p = .032$)。一方、その他8つの因子では、有意な差はみられなかった (Table.3)。

Table.3 ケア役割経験から生じる心理的影響に関する因子項目の時期別平均値

	現在(N=21)		過去(N=30)		df	t 値
	Mean	SD	Mean	SD		
実務的負担	1.80	0.66	1.64	0.68	43.9	0.84
過剰なケア役割	2.54	0.63	2.28	0.63	43.0	1.50
不自由さ	1.85	0.79	1.76	0.81	43.9	0.38
安否の心配	3.33	1.13	2.89	1.37	47.6	1.27
自覚的成熟	2.88	1.23	2.30	1.19	42.3	1.68
家事への貢献	2.93	1.03	2.53	0.96	41.4	1.39
逃避感情	2.18	0.87	1.93	0.89	43.8	1.01
積極的関与	2.93	0.78	2.45	0.77	42.8	2.21*
罪悪感	1.73	0.86	1.94	1.14	48.7	0.76

* $p < .05$

各因子において、要ケア家族（親、きょうだい、祖父母またはその他）を独立変数とした被験者間1要因分散分析を行ったところ、「過剰なケア役割」と「自覚的成熟」において主効果がみられた（それぞれ $F(2, 36.0) = 4.40, p = .045$, $F(2, 35.7) = 4.59, p = .017$)。一方、その他7つの因子においては、主効果はみられなかった。Holm法による多重比較から、「過剰なケア役割」においては、親をケアしている群が祖父母またはその他をケアしている群よりも有意に得点が高いことが示された ($p = .028$)。さらに、「自覚的成熟」においては、きょうだいをケアしている群が祖父母またはその他をケアしている群よりも有意に得点が高いことが示された ($p = .003$) (Table.4)。

Table.4 ケア役割経験から生じる心理的影響に関する因子項目の要ケア家族別平均値

	親(N=16)	きょうだい(N=22)	祖父母・その他(N=20)	F値	多重比較
実質的負担	1.93	1.78	1.49	2.41	
過剰なケア役割	2.63	2.53	2.14	3.40*	親>祖父母・その他*
不自由さ	1.89	2.15	1.64	1.47	
安否の心配	3.02	2.67	3.55	3.22	
自覚的成熟	2.63	3.11	2.03	4.56*	きょうだい>祖父母・その他**
家事への貢献	2.84	2.84	2.50	0.72	
逃避感情	2.21	1.96	2.02	0.34	
積極的関与	2.69	2.76	2.47	0.60	
罪悪感	2.10	1.62	2.05	1.42	

**= $p < .01$ *= $p < .05$

各因子において、要ケア家族の状態（要介護、障害、幼さ、一時的なケガや病気）を独立変数とした被験者間1要因分散分析を行ったところ、「不自由さ」において主効果がみられた ($F(3, 23.1) = 7.40, p = .001$)。一方、その他8つの因子においては、主効果はみられなかった。Holm法による多重比較から、「不自由さ」においては、障害のある家族をケアしている群が要介護の家族をケアしている群よりも有意に得点が高いことが示された ($p = .014$)。また、若い家族をケアしている群が要介護の家族をケアしている群よりも有意に得点が高いことも示された ($p = .017$) (Table.5)。

Table.5 ケア役割経験から生じる心理的影響に関する因子項目の要ケア家族の状態別平均値

	要介護(N=9)	障害(N=26)	幼さ(N=14)	一次的なケガ・病気(N=9)	F値	多重比較
実質的負担	1.42	1.84	1.83	1.51	1.94	
過剰なケア役割	2.05	2.59	2.49	2.19	2.91	
不自由さ	1.25	2.11	2.16	1.56	7.40**	障害>要介護* 幼さ>要介護*
安否の心配	3.82	3.18	2.44	2.96	2.71	
自覚的成熟	2.50	2.58	2.82	2.44	0.20	
家事への貢献	2.78	2.89	2.75	2.17	1.90	
逃避感情	1.99	2.35	1.79	1.65	2.45	
積極的関与	2.53	2.81	2.39	2.58	0.84	
罪悪感	1.74	2.27	1.41	1.74	2.57	

**= $p < .01$ *= $p < .05$

3. ケア役割に対する認知的評価

ケア役割に対する認知的評価については、「拘束感」「限界感」「対人葛藤」「経済的負担」の4因子に含まれる16項目、「介護状況への満足感」「自己成長感」「介護継続意志」の4因子に含まれる14項目について、「1.全くそう思わない」「2.あまりそう思わない」「3.ややそう思う」「4.非常にそう思う」の4件法で回答を求めた。

各因子において、ケア役割を担う期間（1年未満・1年以上）を独立変数とした対応のない検定（Welch検定）を行ったところ、すべての因子において有意な差はみられなかった（Table.6）。

Table.6 ケア役割経験に対する認知的評価に関する因子項目の期間別平均値

	1年未満(N=11)		1年以上(N=39)		df	t 値
	Mean	SD	Mean	SD		
拘束感	1.58	0.60	1.43	0.64	18.9	0.77
限界感	1.50	0.83	1.46	0.70	15.9	0.14
対人葛藤	1.42	0.56	1.71	0.79	25.1	1.45
経済的負担	1.46	0.89	1.37	0.70	15.2	0.33
介護状況への満足感	2.57	0.98	2.77	0.74	14.9	0.66
自己成長感	2.97	0.83	3.24	0.78	17.0	0.98
介護継続意志	2.92	1.15	3.27	0.82	14.5	0.99

各因子において、ケア役割の時期（現在・過去）を独立変数とした対応のない t 検定（Welch検定）を行ったところ、すべての因子において有意な差はみられなかった（Table.7）。

Table.7 ケア役割経験に対する認知的評価に関する因子項目の時期別平均値

	現在(N=21)		過去(N=30)		df	t 値
	Mean	SD	Mean	SD		
拘束感	1.46	0.69	1.49	0.59	38.1	0.15
限界感	1.47	0.74	1.51	0.75	43.1	0.15
対人葛藤	1.69	0.75	1.65	0.77	43.5	0.18
経済的負担	1.38	0.76	1.42	0.75	42.5	0.21
介護状況への満足感	2.76	0.82	2.68	0.78	41.0	0.35
自己成長感	3.11	0.91	3.20	0.71	35.1	0.39
介護継続意志	3.24	0.89	3.12	0.94	44.4	0.46

各因子において、要ケア家族（親、きょうだい、祖父母またはその他）を独立変数とした被験者間 1 要因分散分析を行ったところ、「経済的負担」において主効果がみられた ($F(2, 28.6) = 3.57, p = .041$)。一方、その他 6 つの因子においては、主効果はみられなかった。Holm法による多重比較から、「経済的負担」においては、親をケアしている群がきょうだいをケアしている群よりも有意に得点が高いことが示された ($p = .002$)。また、親をケアしている群が祖父母またはその他をケアしている群よりも有意に得点が高いことも示された ($p = .009$) (Table.8)。

Table.8 ケア役割経験に対する認知的評価に関する因子項目の要ケア家族別平均値

	親(N=15)	きょうだい(N=23)	祖父母・その他(N=21)	F 値	多重比較
拘束感	1.77	1.42	1.31	2.12	
限界感	1.78	1.40	1.42	0.97	
対人葛藤	1.77	1.66	1.57	0.29	
経済的負担	1.90	1.14	1.29	3.57*	親 > きょうだい** 親 > 祖父母・その他**
介護状況への満足感	2.42	2.93	2.65	1.77	
自己成長感	2.96	3.42	2.92	2.69	
介護継続意志	3.00	3.27	3.05	0.45	

**= $p < .01$ *= $p < .05$

各因子において、要ケア家族の状態（要介護、障害、幼さ、一時的なケガや病気）を独立変数とした被験者間 1 要因分散分析を行ったところ、「拘束感」「限界感」「対人葛藤」「経済的負担」の 4 つの因子において主効果がみられた（それぞれ $F(3, 26.2) = 3.00, p = .049$ 、 $F(3, 23.1) = 7.78, p = .001$ 、 $F(3, 24.7) = 8.89, p < .001$ 、 $F(3, 24.6) = 3.64, p = .027$)。一方、その他 3 つの因子においては、主効果はみられ

なかった。Holm法による多重比較から、「拘束感」においては、障害のある家族をケアしている群が一時的なケガや病気の家族をケアしている群よりも有意に得点が高いことが示された ($p = .033$)。「限界感」においては、要介護の家族をケアしている群と、障害のある家族をケアしている群が一時的なケガや病気の家族をケアしている群よりも有意に得点が高いことが示された ($p = .048, p = .034$)。「対人葛藤」においては、障害のある家族をケアしている群が一時的なケガや病気の家族をケアしている群よりも有意に得点が高いことが示された ($p = .009$)。「経済的負担」においては、要介護の家族をケアしている群が幼い家族をケアしている群と一時的なケガや病気の家族をケアしている群よりも有意に得点が高いことが示された ($p = .024, p = .024$)。さらに、要介護の家族をケアしている群がよりも有意に得点が高いことも示された (Table.9)。

Table.9 ケア役割経験に対する認知的評価に関する因子項目の要ケア家族の状態別平均値

	要介護(N=10)	障害(N=25)	幼さ(N=15)	一時的なケガ・病気(N=9)	F値	多重比較
拘束感	1.46	1.65	1.37	1.13	3.00*	障害>一時的なケガ・病気*
限界感	1.70	1.64	1.43	1.03	7.78**	要介護>一時的なケガ・病気* 障害>一時的なケガ・病気*
対人葛藤	1.72	1.85	1.63	1.09	8.89**	障害>一時的なケガ・病気**
経済的負担	1.80	1.50	1.12	1.06	3.64*	要介護>幼さ* 要介護>一時的なケガ・病気*
介護状況への満足感	2.70	2.52	2.93	2.83	0.83	
自己成長感	3.10	2.99	3.33	3.19	0.48	
介護継続意志	3.15	2.98	3.25	3.28	0.35	

**= $p < .01$ *= $p < .05$

IV. 考察

1. 大学生のケア役割経験の実態

今回の調査では、女子大学生216名の有効回答の中からケア役割経験があると回答したものは63名であり、全体の約35%が家族のケアを経験していることが明らかとなっている。ケア役割経験の時期については、過去に経験があると答えたものが34名、現在と答えたものが24名であり、全体の9%が現在進行中でケア役割を担っている。大学生に家族の介護経験の有無を尋ねた調査はなく、北山ら (2015) では、ヤングケアラーの可能性のある中学生割合は1.2%、濱島ら (2018) の高校生に対する調査では5.2%となっている。今回の調査では、ケア経験の期間を一時的なもの (1カ月未満) も含めているため、これまでのヤングケアラー研究における実態調査の結果よりも高い割合となっていることが考えられる。また、2015年、2017年の一般社団法人日本ケアラー連盟のヤングケアラープロジェクトの調査報告ではケアを担う子どもの数は学年が上がるにつれて増えてくる傾向にあることから、ヤングケアラーよりも若者ケアラーの割合が高くなっている可能性がある。さらに、今回の調査協力者が保育、教育に関する学科に所属し、対人援助職を目指す学生が多いことも要因のひとつとして考えられる。

ケアを必要としている家族については、親、きょうだい、祖父母の割合に大きな差は見られていない。前述のヤングケアラープロジェクトにおいて、子どもがケアをする対象として最も多いのはきょうだい、母親であることが明らかとなっているが、渋谷 (2018) は子どもが祖父母を介護するケースもイギリスと比較し日本ではより多く存在するのではないかという点について日本の家族形態の特徴などから言及している。今回の調査でも同居している祖父母のケアとして挙げられているケースが他の要ケア家族の割合と同程度で存在していることが明らかとなっている。

2. ケア役割経験から生じる心理的影響

大学生のケア役割経験から生じる心理的影響については、ヤングケアラーの心理尺度として作成されたものを用い、否定的側面として「実質的負担」や「過剰なケア役割」、「不自由さ」、「安否の心配」、「逃避感情」、「罪悪感」、また肯定的側面として「自覚的成長」や「家事への貢献」、「積極的関与」がそれぞれどのように生じるのかを調査した。今回明らかになったのは、ケア役割経験が一時的なものも含む1年未満である場合、

1年以上その役割を担っている者よりもケアを担っていない状況に対する「罪悪感」が生じやすいということである。これについては、田野中（2016）が示す、統合失調症の母親をケアする娘が病状を説明されないことによる困難を抱えている状況との類似性がうかがえる。また、渋谷（2014）で医療福祉専門職が語る子どもたちのケア役割に対する過剰機能への自責感がある可能性、過剰適応状態である可能性も考えられる。これらことから、大学生あるいはそれ以前のケア役割経験においては、ケア経験の期間が短い場合に家族間のケアに対するコミュニケーションが十分でなく、要ケア家族の障害や疾病に対する知識が不十分であること、あるいは要ケア家族が必要としているケア内容についての十分な共通理解がないままに過剰な責任を感じてしまう可能性があることが示唆される。

さらに、今回の調査では、要ケア家族が誰であるか、あるいは要ケア家族の状態の違いにおいても、その経験から生じる心理的影響に違いがあることが明らかとなっている。まずは要ケア家族が親である場合、祖父母のケアよりも「過剰なケア役割」を担っていることが示唆されている。そして、要ケア家族の状態においては、要介護の状態である家族よりも障害や幼さのある家族のケアを担う場合に「不自由さ」を感じやすいことが分かっている。今回、これらの群の内訳としてケアを必要としている祖父母は要介護の状態であることがほとんどであり、親は障害がある場合、きょうだいは障害あるいは幼さがある場合となっている。このことから、障害のある親に対するケア役割経験が、「過剰なケア役割」や「不自由さ」といった心理的負担が最も生じやすい場合であることが考えられる。一方、幼さや障害のあるきょうだいのケア役割経験については、祖父母のケアを担う場合に比べて「自覚的成熟」を感じやすいことが明らかとなっている。障害のある子どものきょうだいの特徴として、Meyer（1994：2000）は、きょうだいに見られる特有の経験や悩みが苦痛にもプラスの影響にも働きうると述べたうえで、プラスの影響のひとつにきょうだいは精神的な成熟や忍耐力があることについて言及している。今回の調査では幼いきょうだいと障害のあるきょうだいに対するケア役割経験を詳細に分けることはできていないが、障害のある子どものきょうだいが受けるプラスの影響は、ケア役割経験によって生じているという可能性もうかがえる。

3. ケア役割に対する認知的評価

大学生のケア役割に対する認知的評価では、介護者に対して肯定的側面と負担感を測定するために作成された尺度を用い、介護に対する否定的な側面として「拘束感」や「限界感」、「対人葛藤」や「経済的負担」についてどのように認識しているかを尋ねている。また、肯定的な側面としては「介護状況への満足感」や「自己成長感」、「介護継続意志」について尋ねているが、どちらの側面においてもケア役割経験の期間や時期による違いは見られていない。一方、要ケア家族が誰であるかという違いについては、要ケア家族が親である場合、きょうだいや祖父母の場合と比較し「経済的負担」が大きいと認識していることが明らかとなっている。これについては、渋谷（2014）の、子どもからのケアを必要としている親の子育て相談の中で、その多くが経済的不安について語られている状況と類似する結果であると考えられ、このような家庭では親だけでなく大学生あるいはそれより以前の子どもも経済的負担を強いられている可能性が示唆されている。

また、要ケア家族の状態による違いでは、「拘束感」「限界感」「対人葛藤」「経済的負担」において差があることが明らかとなっている。まず、要ケア家族の状態が要介護あるいは障害である場合において、一時的なケガや病気の家族のケア役割よりも「拘束感」や「限界感」を認識しやすいことが示唆されている。これについては、先述のケア役割経験の期間によって差がみられていないことも合わせると、要ケア家族の状態が慢性的な困難であることが、ケア役割に対する負担を強く認識する要因となっていることが考えられる。さらに、要ケア家族の状態が障害である場合において、一時的なケガや病気の場合よりも「対人葛藤」を認識していることが明らかとなっている。ここでの「対人葛藤」は要ケア家族に対する葛藤、あるいはその他の家族に対する葛藤を表しているが、要ケア家族の状態が障害である場合、障害のある本人やその家族の障害受容の程度、精神障害や知的障害などで生じる外見と内面のギャップや状態像に対する理解の困難さなどが影響している可能性が考えられる。また、松崎（2015）は、若者介護者の孤独や孤立、社会的排除に関する困難について言及しているが、今回の調査からは、家族のケアを担う場合、家庭内においても孤立や孤独といった困難が生じやすい可能性があることも示唆される。

引用・参考文献

- 濱島淑恵・宮川雅充 (2018) . 高校におけるヤングケアラーの割合とケアの状況—大阪府下の公立高校の生徒を対象とした質問紙調査の結果より—. 厚生指針, 65 (2) , 22-29.
- Harris,S.L. (1994). *Siblings of children with autism: A guide for families*. Rockville, Maryland: Woodbine House.
- 北山沙和子 (2011) . 家庭内役割を担う子どもたちの現状と課題：ヤングケアラー実態調査から.兵庫教育大学大学院学校教育研究科平成23年度修士論文.
- 北山沙和子・石倉健二 (2015) . ヤングケアラーについての実態調査—過剰な家庭内役割を担う中学生—学校教育学研究, 27, 25-29.
- Lawton, M. P., Moss, M., & Kleban, M. H. (1991) . A two-factor model of caregiving appraisal and psychological well-being. *Journal of Gerontology*, 46, 181-189.
- Lazarus, R.S.,& Folkman, S. (1984) . *Stress, appraisal, and coping*, New York:Springer. (本明寛・春木豊・織田正美 (訳) (1991) . ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究. 実務教育出版.)
- 松崎実穂 (2015) . メディアにみる「家族を介護する若者」—日本における社会問題化を考える.ジェンダー&セクシュアリティ, 10.
- Meyer,D.J (2000). 特別なニーズのある子どものきょうだい—特有の悩みと得がたい経験—きょうだい支援の会.
- Meyer,D.J.&Vadasy,P.F. (1994). *Siblings Workshops for Siblings of Children with Special Needs*. Paul H Brookes Publishing Co.
- 奥山滋樹 (2018) . ヤングケアラー心理尺度改訂版の開発—項目表現の変更とカットオフポイントの検討— . 東北大学大学院教育学研究科研究年報. 67 (1) , 257-266.
- 櫻井成美 (1999) . 介護負担が持つ負担軽減効果. *心理学研究*. 70 (3) , 203-210.
- 柴崎智恵子 (2005) . 家族ケアを担う児童の生活に関する基礎的研究—イギリスの“Young Carers”調査報告書を中心に—. 田園調布学園大学人間福祉研究, 8, 125-143.
- 澁谷智子 (2014) . ヤングケアラーに対する医療福祉専門職の認識—東京都医療社会事業協会会員へのアンケート調査の分析から— *社会福祉学*, 54 (4) , 70-81.
- 澁谷智子 (2018) . ヤングケアラー—介護を担う子ども・若者の現実. 中公新書.
- Siegel,B. & Silverstein,S. (1994). *What about me ? : Growing up with a developmental disabled sibling*. New York : Plenum Press.
- 武田卓也 (2016) . 若年介護問題の研究：若年介護者を支援する仕組みの形成に向けて. 桃山学院大学大学院社会学研究科2015年度博士論文.
- 田野中恭子・土田幸子・遠藤淑美 (2015) . ドイツにおける精神に障害のある親を持つ子どもへの支援—CHIMPSに焦点をあてて—. 佛教大学保健医療技術学部論集, 9.

Research on ambivalent perceptions of college students' experiences of care

Yuki HIWATASHI

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

The purpose of this study is to clarify the psychological impact caused by college students' experience of family care roles and the ambivalence of their cognitive evaluation of these roles, based on the characteristics of the care roles they experience. As a result of the questionnaire survey conducted on university students, it was found that when the duration of the care role was temporary or less than one year, the students were more likely to feel "guilty" in situations where they were not taking care of the family member in need of care, due to insufficient understanding of the family member's condition. In addition, in terms of cognitive evaluation of care roles, when the condition of the family member in need of care is chronically difficult, it is thought that the family member is strongly aware of the burden of the care role, such as a "sense of constraint" and "sense of limitation," and the characteristics of the care role experienced and the psychological impact and cognitive evaluation resulting from it are characterized by positive and negative aspects, respectively. The characteristics of the care roles experienced and the psychological effects and cognitive evaluations resulting from them were found to be characterized by positive and negative aspects, respectively.

Keyword : care for the family, college students, psychological effects, youth carers